

講演『頭と心を動かす外国語の授業』

関西大学外国語教育研究機構・

大学院外国語教育学研究科教授 田尻 悟郎

NHKの番組「プロフェッショナル」（仕事の流儀）に当時中学英語教師として出演された田尻悟郎先生は、やはり外国語教育のプロそのものであった。講演は2時間半に及び、具体的な内容で、聴衆を絶えず引きつけた。氏は英語授業の実践指導事例集『達人にみる授業の組み立てとアイデア集』をはじめ、多数の実践的な著書や数々の講演で有名である。外国語教育のプロフェッショナルとは、卓越した発想転換と暖かい人間性、そして生徒の心を引きつける授業のためのたゆまぬ努力に基づいていることが再確認できた。講演では、最初から最後まで参加者の頭と心を動かす内容そのもので、大学の授業を再考する新鮮なものであった。田尻氏自身の教育実践から、明日の授業に役立つ具体的な提言がいくつかあった。いかに生徒の心を授業に向かせるか、どうしたら生徒が伸長感、達成感、満足感を得ることができるかに関する提言である。氏は中学校の授業だけでなく、大学の授業（経済学部リーディング、スポーツ推薦の入学者の英語クラス、教職科目の英語科教育法、大学院の演習）においても、学習者が目標言語を使う喜びを共有できる『学びの共同体』の形成を目指していることが理解できた。

以下に学習者の頭と心を動かす授業を実現するための氏の提言をまとめてみたい。

提言①

外国語教育において、教師は学習者の目標言語に対する（理解）—（習熟）—（習得）のプロセスをよく把握する。そして、習熟のために意味内容のある言語活動に力を注ぐ。

理解するための基本事項は教えるが、授業での中心は学習者が主体的に参加する言語活動である。その結果として言語の習得が期待できるのである。教師が一方的に文法説明や英文和訳に時間を費やすほど、生徒の心は授業から離れ、言語習得も期待しにくい。

提言②

考える—参加する—頭を動かす—会話する—相談する—助け合う（コミュニケーションタスク）。

文法の基本事項はおさえつつも、教師側の説明をできるだけ控える。授業を進めるベクトルが教師から生徒に向かうだけでなく、生徒が考え、自ら知りたい気持ちになるコミュニケーションタスクを与えることで、授業のベクトルが生徒同士、さらに、生徒から教師に向かう。教師主導型の授業から学習者中心の授業への転換である。

提言③

教師は生徒が考える時間を「待つ」態度が必要である。

学習者の自律性、自主性の形成である。氏は生徒が言った言葉にはと気づかされたと言う。「先生待つて。」「先生、先に説明しないで。」「どうせ分からなくなったら聞くから、それまで待つて。」答えを先に言わないで考えさせることの教師側の意志力が必要である。

提言④

意味内容があり、生徒が考え、想像力を促す教材や授業環境に配慮すべきである。

氏は以下のわずか3行の英語（中学校のテキスト）に出会い、それを生徒に教えた時、教師としての自己変革が起こったという。生徒の想像力、感性、共感、愛情と思いやりなど、予期せぬ生徒の反応に驚き、教師としての授業観がその時に変わったと言う。

Mom and Dad work at a factory from early morning till night.

I look after my little brothers and sisters.

I don't attend school. (a girl of 8, South Asia)

出典（1997 Sunshine English Course Book 1, Review Reading）

この英文を黙読させてから、氏は英語で作者の生活について生徒に尋ねた。

What kind of life is she leading? 日本語訳や文法の説明をする前に、生徒は真剣に3行の英語を読み、鋭く何度も行間の意味を読み、アジアの少女の貧しい家庭や境遇を想像させる。すると、学習者は他者への思いやり、今の日本の生活との比較、世界の経済・教育格差など、しみじみと考えて、多様な答えを返してくれたと言う。

英文の難易度が変わる高校・大学レベルにおいても、意味内容があり心に響く教材は、学習者の想像力とモチベーションを高める。氏は大学の経済学部のリーディングの授業でも、学部生の関心のあるテーマを常に選び、パラグラフの行間の意味を鋭く読み取る訓練をさせている。

氏は講演で中学1年生から、高校、大学で使用している教材（8枚）をもとに、生徒や学生が頭を動かし、心に響く授業とはどのようなものであるかを、具体的に紹介した。実際の授業での教師の態度、生徒や学生の反応などをリアルに演技しながら、再現してくれた。明日からの私たちの授業に生かせるタスク、問いかけ、教材など示唆に溢れるものであった。すべて、氏の教育哲学とその実践に基づく具体的な話であり、納得することが多かった。

講演の最後では、参加者からの活発な質問があった。質問に関連して、氏はJohn Lennon Happy Christmas (War Is Over) を使った授業も映像を使って紹介した。氏の温かい人間性と国際性に触れ、外国語教育は人間教育であり、国際理解教育であると再確認した。

個人的には、氏が20代の中学教師の頃から優れた授業力、指導力、創造性は熟知していたつもりである。また、本大学の教職科目の英語科教科法Ⅰ、Ⅱの講義でも氏の授業指導のビデオを活用してきた。今回の講演を通して、なぜNHKが氏をプロフェッショナルと呼び、氏の流儀を全国に放映したかがよく理解できた。

氏のように外国語を教える天賦の才能がある人は多くないかもしれない。しかしながら、日々学生と向き合い、学習者中心のタスクを取り入れ、意味内容のある教材を提供する努力から授業は変えられそうである。

私は外国語の授業は4つのEn: **“Enjoy, Encourage, Enrich, Enlighten”**を教師と学習者が共有すべきであると考えてきた。つまり、Enjoy—生徒も教師も共に授業を楽しみ、Encourage—常に生徒を励まし、Enrich—授業内容を深め、Enlighten—生徒に新たな世界観や視野を紹介して、啓蒙することである。それが、学び続ける教師であろう。氏の授業には上記の4つの要素がしっかりと含まれている。

外国語教育は人間教育である。我々も明日からの授業において、教室内に「学生の心を動かす学びの共同体」を形成する努力を惜しまず、外国語教育のプロフェッショナルを目指したいものである。時々、田尻先生の提言と努力を想起しながら。

文責（中村 耕二）